

シャチの骨のつくりかた

シャチ成獣の掘り出し。
背骨、肋骨が出てきました。



キツネ、シカ、アザラシ…。博物館に並んでいるいろいろな動物の白い骨。あれは、どうやって作るか知っていますか？ 時間がかかるし、においても強烈。やっかいな作業なのです。

3月初め、石狩浜に5年間も埋めていた2頭のシャチの死体を掘り出しました。平成17年2月に知床の羅臼町で流水に閉じ込められて死んだ群れの一部で、体長6mのメス成獣と体長2.7mのオス

幼獣です。当時、現地で解剖調査を行った後、死体を譲り受けた北海道開拓記念館が、骨格標本にするために石狩まで運んできたのです。

動物の死体から軟組織（いわゆる「肉」）を取り除いて骨だけにするには、いくつかのやり方があります。正統な方法は、タンパク質分解酵素（家庭用洗剤にも含まれる

成分）に漬けて肉を分解する方法や、乾いた動植物を食べるカツオブシムシという昆虫に骨以外を食べさせてしまう方法などです。ただしこれらの方法は、液温管理や換気が必要だったり、虫を密封しないといけない（博物館内で逃げられると乾燥標本や布などを食べられてしまう！）など、設備が整っていないと危険です。

手軽な方法は「煮る」。できるだけ肉をそぎ落としたり、後は鍋に入れてグツグツと湯で煮てしまします。何時間も煮込んで肉が軟らかくなったところを、ピンセットなどで丁寧に取り除いていきます。いしかり砂丘の風資料館の標本は、ほとんどこうやって作っています。問題は、とても臭いこと。魚を食べ

ているイルカやアザラシを煮たときは、実に強烈です。

困ってしまうのが、クジラのようにバラしても鍋に入らないくらい大きい動物。残された最後の手段が「埋める」です。砂に埋めて、砂中の

るのを待つのです。今回のシャチも、この方法です。

埋める場所が土だと骨に色がついてしまうため、その心配がないきれ

いな砂がある石狩が選ばれたのです。欠点は、時間がかかること。肉が完全に分解されるまで何年もかかります。しかし、シャチなどクジラの骨格標本を作るための、避けて通ることのできない最初の一步なのです。

5年ぶりに再会した2頭のシャチ。すっかりきれいな骨になっていて、成獣は開拓記念館へ、幼獣は砂丘の風資料館へと引き取られていました。

しかし骨格標本の完成はまだまだ先。洗浄や漂白処理、骨の並びの決定…。最終的には骨格の組み立ても残されています。そんな作業を手伝ってくれる「骨ボランティア」やってみませんか？

（志賀健司）

シャチ（幼獣）の骨は、掘り出したままの姿で、発掘風景のパネルとともに4月29日（木・祝）より資料館で展示します！

詳しくは24ページの「いしかり砂丘の風資料館」の欄をご覧ください。



2005年冬、解剖後のシャチを砂の中に埋めました。

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館
☎62-3711 ✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp